鎌倉の埋蔵文化財2

Buried Cultural Properties in Kamakura 2

平成8年度発掘調査の概要

平成10年3月
鎌倉市教育委員会

～は　じ　め　に～

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでおり、そのなかには埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。建設工事等によって失われる遺跡は発掘調査によって記録化がはかられ、その成果は整理作業を経て発掘調査報告書として刊行されますが、多分に学術的な内容の刊行物となり、難解な考古学の専門用語も多く、とかく一般の方にはなじみにくいものとなりがちです。

鎌倉市教育委員会では市内で実施された発掘調査の成果を皆様になるべくわかり易くご紹介し、かけがいのない埋蔵文化財の大切さを広く市民の皆様に知っていただくために、平成８年に『鎌倉の埋蔵文化財１』を発行いたしましたが、多くの皆様から予想以上のご好評をいただくことができました。

ここに平成８年度の発掘調査の概要を紹介する冊子を『鎌倉の埋蔵文化財２』として刊行する運びとなりました。これからもさまざまな方法で発掘調査の成果をお知らせするように勤めてまいりますので、よろしくお願い申しあげます。

～目　次～

1. 大倉幕府周辺遺跡群・・・・・・・・・・3
2. 寺分藤塚遺跡・・・・・・・・・・・・・4
3. 史跡永福寺跡・・・・・・・・・・・・・6
4. 松谷寺やぐら・・・・・・・・・・・・・8
5. 由比ケ浜南遺跡・・・・・・・・・・・・10
6. 東勝寺跡・・・・・・・・・・・・・・・12
注目された出土遺物・・・・・・・・・・14
英文要旨・・・・・・・・・・・・・・・・15

◎表紙写真の説明

史跡永福寺跡、経塚出土の白磁小壷

高さ7.4cm、直径10.4cm

～例　言～

◎本書には平成８年度に市内で発掘調査の実施された主な遺跡の調査概要を遺跡の時代順に掲載しました。

◎本書に掲載した遺跡の発掘概要については各調査担当者に執筆をお願いし、編集は鎌倉市教育委員会文化財課が担当しました。また写真等は当委員会の保管資料を使用しましたが、一部は各遺跡発掘調査団の保管資料を使用させていただきました。

◎本書の作成には、次の方々のご協力をいただきました。深く感謝をいたします。

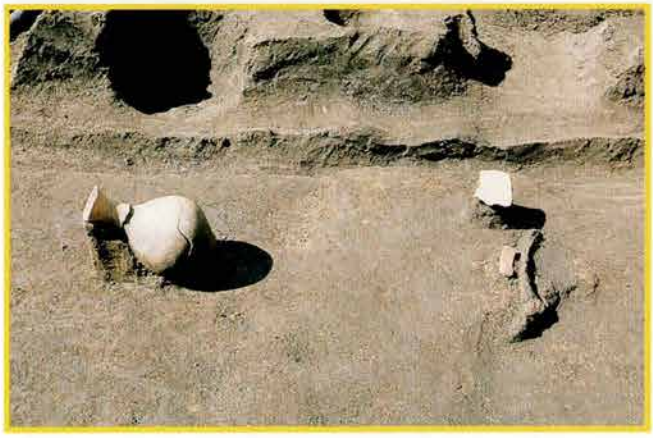
菊川泉、菊川英政、木村美代治、斎木秀雄、宗臺秀明、宗臺富貴子、田代郁夫、田村良照、土屋浩美、手塚直樹、野本賢二、福田誠、松尾廣子、馬淵和雄

（五十音順・敬称略）

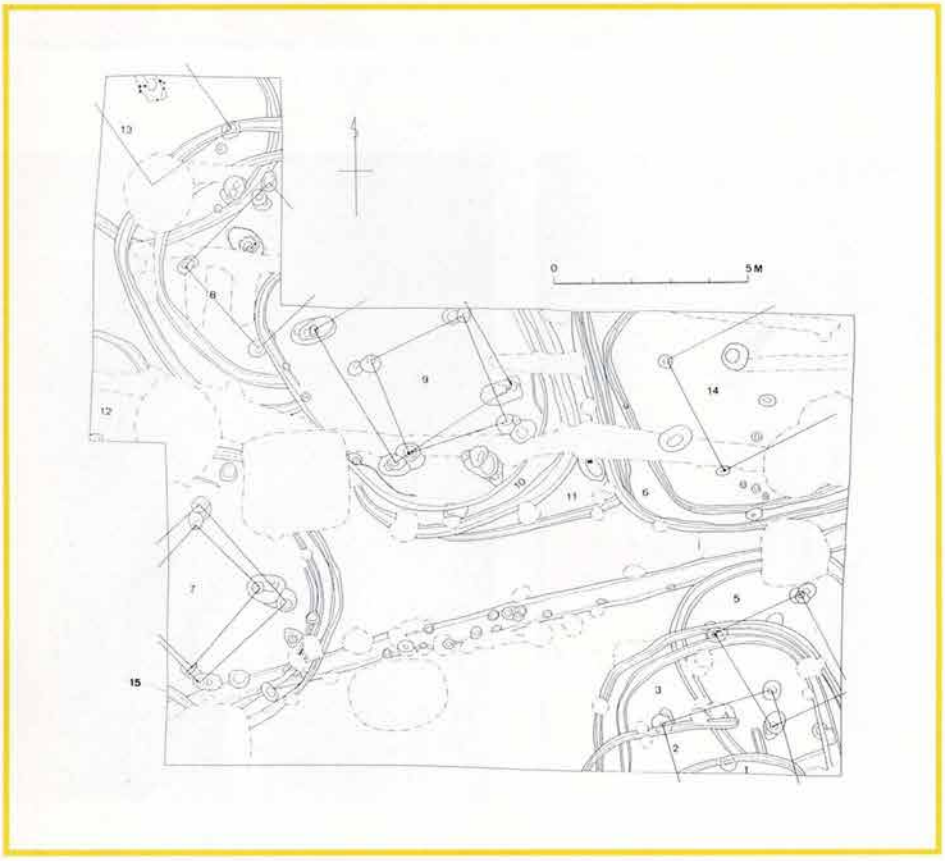
● 弥生時代の集落遺跡

鎌倉市内では台の丘陵上、手広一帯、長谷の海岸部に近い砂丘上、そして二階堂から雪ノ下にかけての滑川の北側一帯などに弥生時代（紀元前２世紀頃～紀元３世紀頃：およそ2300年前から1700年前ぐらいまで）の遺跡のあることが知られています。これまでにも雪ノ下一帯では幾つかの地点の発掘調査によって弥生時代の遺構や遺物が発見されていますが、今回の発掘調査によってはじめて、集落跡の様子をある程度まとまったかたちで明らかにすることができました。発掘調査では竪穴住居址14軒、溝１条などの遺構が発見されています。14軒の住居址のうち、４軒は火災に遭ったと見られる焼失住居址であり、また３軒の住居址では当初の規模を拡張している様子が確認されています。これらの住居址をはじめとする遺構の年代は、弥生時代の中期後半から後期前半、いわゆる宮ノ台期（南関東における弥生時代の土器型式による時期区分で１世紀頃、およそ2000年前）のものとみられます。出土遺物をみると、弥生土器では壺や甕が多く出土しています。特に注目されるのは出土遺物のなかに石器の占める割合の多いことで、扁平片刃石斧７点、太型蛤刃石斧４点、柱状片刃石斧１点、抉入柱状片刃石斧１点、有頭石錘３点などが出土しています。

弥生時代の遺構発見状況



弥生土器の出土状況



弥生時代遺構全体図

磨製石斧の出土状況（竪穴住居7）

2.寺分藤塚遺跡　Site of Terabun Fujizuka

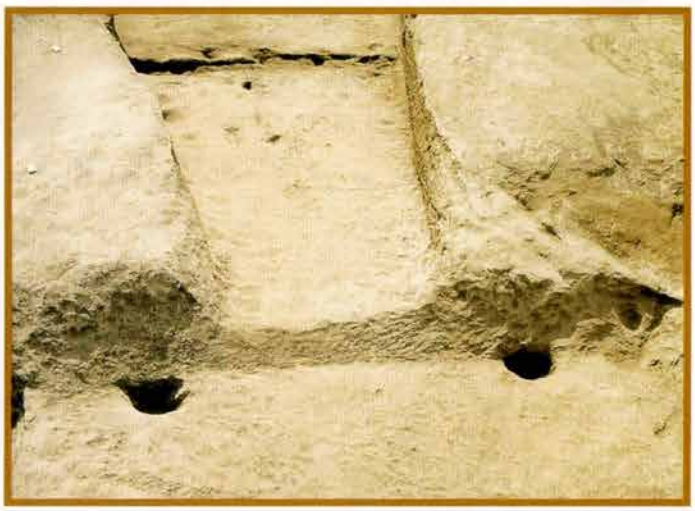
● 古墳時代後期の横穴群

横穴墓は古墳の横穴式石室における埋葬様式の系譜をひく墓制で、古墳時代の後期（主に７世紀代）に盛んに造られたものです。通常は数基の横穴墓が支群を構成し、さらに複数の支群が群を形成する群集墳の一種として営まれます。神奈川県内では多摩川流域の川崎市域や鶴見川流域の横浜市域、大磯丘陵や三浦半島地域に横穴墓の主要な分布が見られますが、藤沢市から鎌倉市にかけての地域も県内における代表的な分布域のひとつです。鎌倉市内では山崎地域の丘陵部、海岸線にほど近い稲村ガ崎地域の丘陵部に横穴墓の主要な分布が見られています。昭和３０年代の宅地開発で消滅してしまい、現在ではその姿を知ることはできませんが、かつて山崎横穴墓群という２群４２基からなる一大横穴墓群が存在していました。

寺分藤塚遺跡は、この山崎横穴墓群の西南約４００mの位置に立地しています。発掘調査では調査区の西側で７基、東側で１基の合計２群８基の横穴墓が発見されました。

調査の結果、寺分藤塚遺跡で発見された横穴墓はその形態的特徴からふたつに分類することができます。ひとつは１号墓や２号墓のように玄室の平面形が撥形でアーチ形の天井に有縁の高棺座をもち、墓道が前面に長く伸びる形態をもつ横穴墓です。そしてもうひとつは玄室の平面形は１・２号墓と同様でありながら、玄門部に間仕切溝が掘られ、羨門部には方形の墓前域が設けられた形態をもつもので、３・４・５・６・７号墓のような形態をもつ横穴墓です。この形態のものには羨門から墓道へと連結する部分に２つの柱穴が発見されていることから、羨門部に扉状の施設が設けられていたものと思われます。

寺分藤塚遺跡横穴墓群全景



６号墓の羨門部で発見された門柱状の柱穴

１号墓正面

２号墓の構築状況

出土遺物についてみると１号墓では玄室内から玉類が出土し、墓道の床面上から須恵器の平瓶と土師器の長胴甕が出土しています。墓道の床面上から出土した土器類はおそらく横穴墓における埋葬時に行われた墓前祭祀に使用された遺物と想定されます。このほかにも２号墓では土師器が、また６号墓では須恵器が出土しています。出土遺物の年代観から１号墓がつくられた時期はおおむね７世紀中葉頃と推定されます。

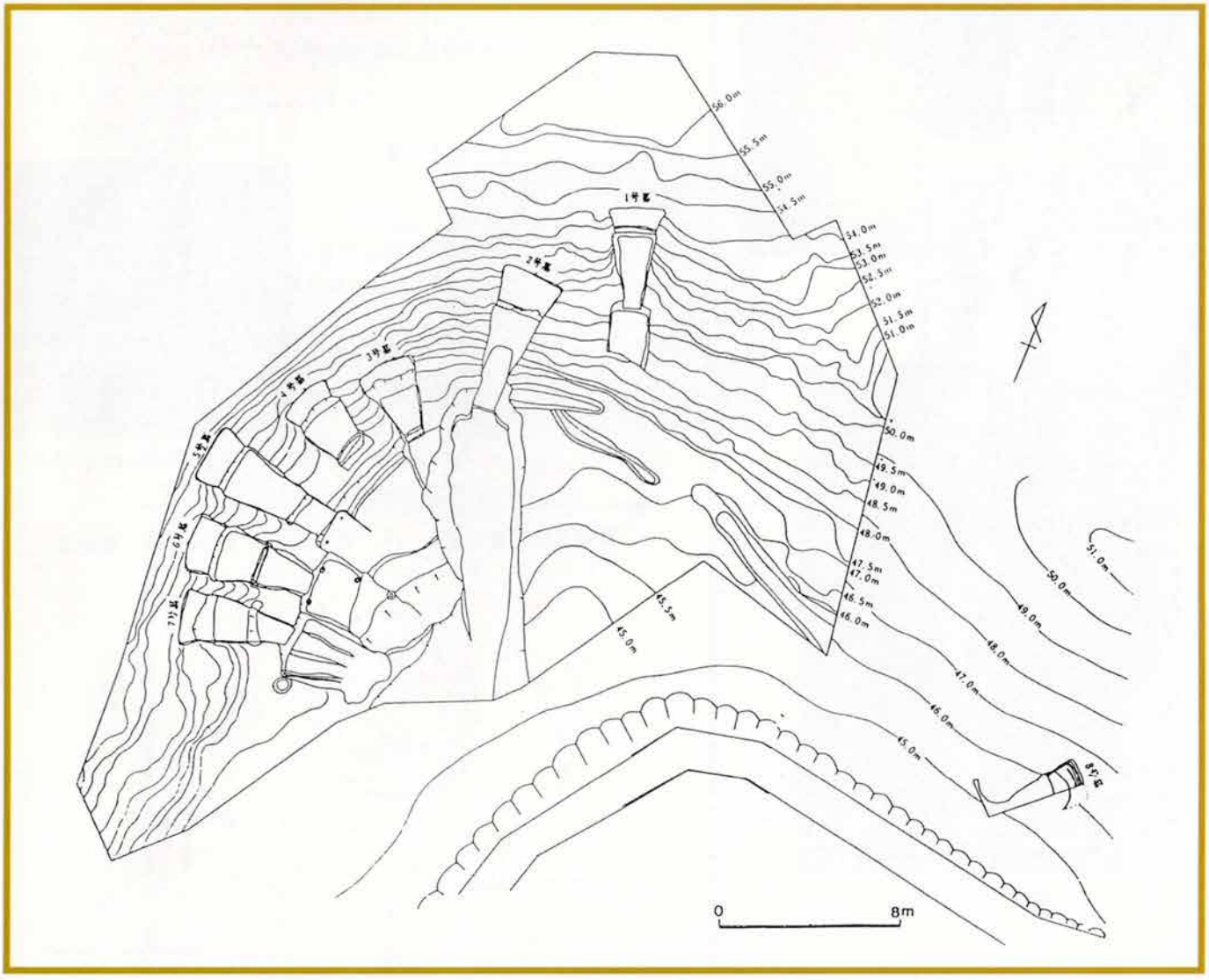
このように寺分藤塚遺跡では前庭部が比較的良好に遺存しており、横穴墓とその墓前域を含めた墓域の在り方を知る上で貴重な成果をあげることができました。

１号墓出土の土師器

１号墓出土の鉄製品・玉類

１号墓出土の須恵器

6号墓出土の須恵器



寺分藤塚遺跡の横穴墓群全体図

3.史跡永福寺跡　Site of Yofukuji Temple (Registered National Historical Property)

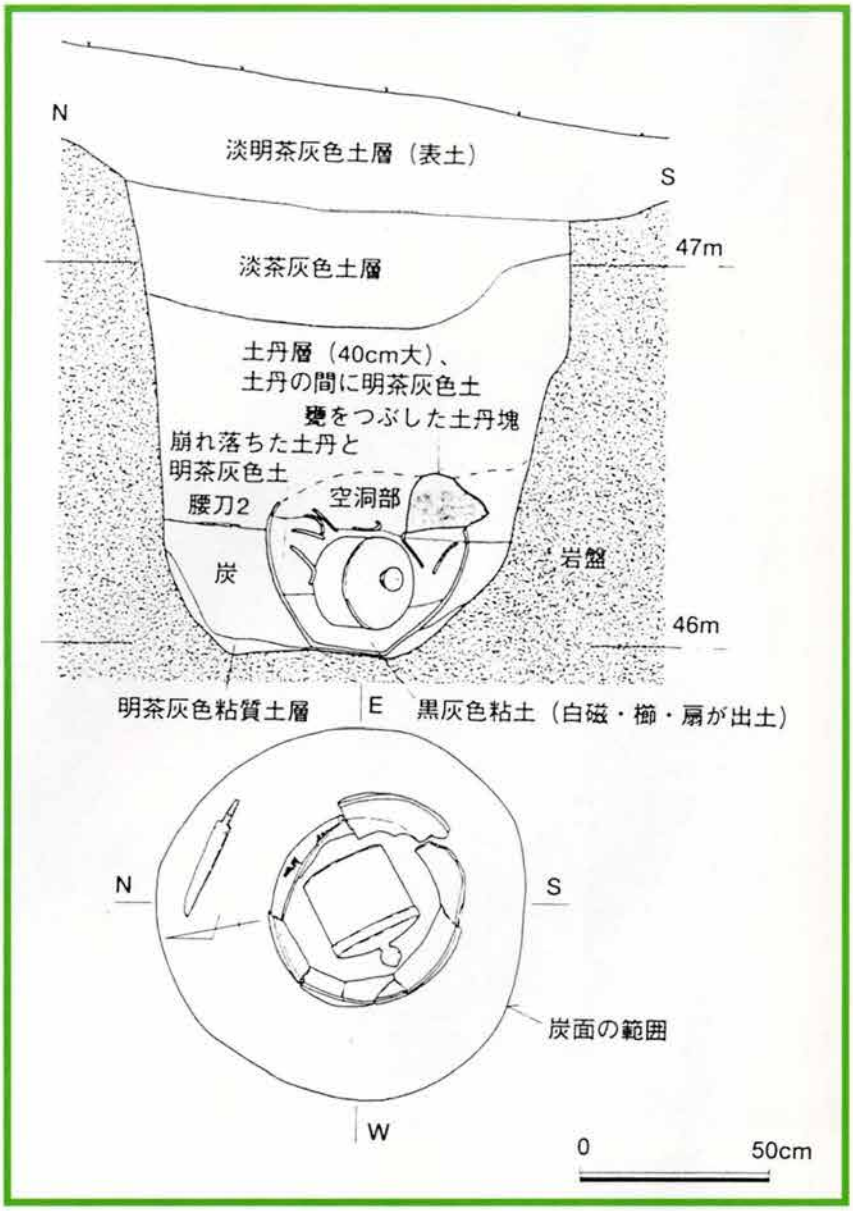
● 浄土への祈り～経塚

永福寺跡苑池と東の山の経塚の位置

永福寺跡では建物や庭園の部分とあわせて、周囲を取り囲んでいる山が寺が営まれていた時代にどのようになっていたのかを確認するための調査を行いました。その結果、東の山の頂上で経塚が発見されました。経塚とは仏教の経典を地下に埋めたものを言います。平安時代の中頃から作られ始めたと言われており、本来は末法の世が終わり弥勒菩薩が下生するといわれる５６億７０００万年後まで経典を保存する目的で作られたものでした。鎌倉時代以降になると、その目的は経塚を作る人の往生や現世での利益を願うものに変わっていきました。また身近な人の追善供養などの目的でも作られたようです。今回見つかった経塚は、鎌倉時代のごく早い段階、12世紀末頃に作られたものであることがわかりました。市内で発掘調査によって鎌倉時代の経塚が見つかったのはこれが初めてです。この経塚は岩盤に掘られた直径約1.2m、深さ約1.2mの穴の底に渥美（愛知県渥美地方で作られた焼き物）の甕が据えられているものでした。甕の大きさは口

経塚の発見状況

経筒の出土状況



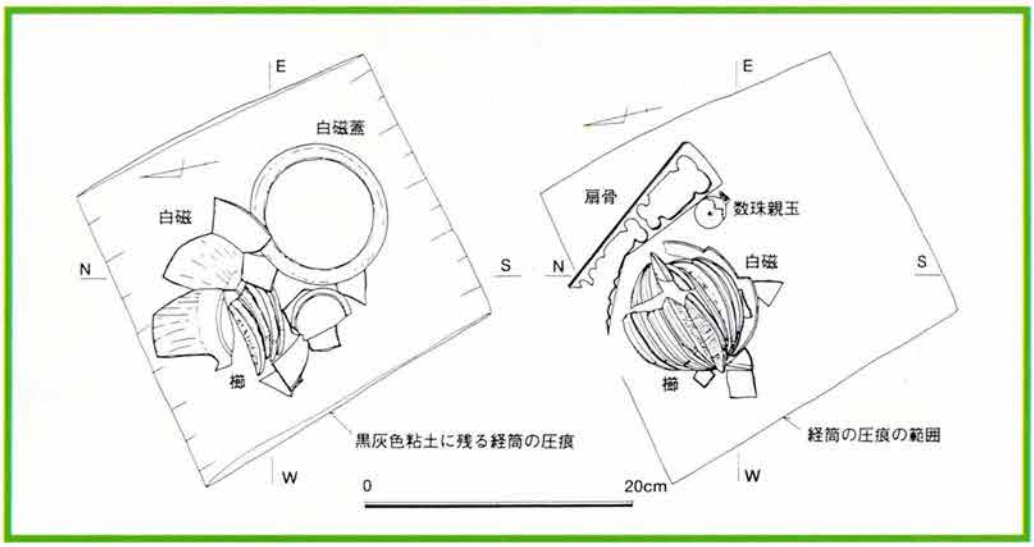
経筒の出土状況（上段：断面図、下段：平面図）

径35.1cm、高さ47.8cm。甕の口は上向きに置かれた捏鉢で蓋されていました。甕の中には銅製の経筒（経典を入れる容器）と櫛が10枚入った中国景徳鎮産の白磁の小壺、扇、数珠などが納められていました。経筒の大きさは直径24.6cm、高さ31cm。経筒としてはかなり大ぶりなものです。甕の外側は炭で埋められていましたが、その上には2振の腰刀が置かれていました。通常、経筒には経塚を作った人の名前や経塚を作った日付・目的などが刻まれていることが多くありますが、残念ながら今回見つかったものにはこれがありませんでした。また経筒の中に納められていたはずの経典もすべて腐ってなくなっており、わずかに経巻の軸木だけが残っていました。誰が、いつ、どんな目的で経塚をつくったかのかを知る直接的な手がかりは失われてしまったわけです。しかし、推測するに足る手がかりはあります。それは、経筒の納められていた甕や捏鉢が12世紀末につくられた特徴を備えていることです。経塚が作られた時代を考える上で、これは大変重要な手がかりとなりました。12世紀末という時代は、永福寺が建てられた時代です。経塚が見つかった場所は伽藍のほぼ真正面にあたり、寺を一望できる場所です。こうした絶好の場所に経塚を作ることのできる人物は源頼朝か、彼の近親者、あるいは永福寺の建立に深くかかわった人物と想像することができるでしょう。永福寺跡の伽藍や庭園の調査が進み、荘厳な寺院の姿が明らかになりつつあることとあわせて、寺を取り囲んでいる山に作られた宗教遺構が見つかったことは、貴重な発見といえます。『吾妻鏡』には、4代将軍を退いた藤原頼経が寛元3年（1245年）、永福寺の奥山に法華経を納めたという記録があります。これは今回見つかった経塚とは年代的に合致しません。また「奥山」が具体的にどこをさしているのかもわかっていません。永福寺跡の周りの山のどこかに、今も埋もれたままになっているのかもしれません。この記録と発見された経塚の例などから考えて、永福寺跡の周りには複数の経塚が作られていたことが判ってきました。私達現代人はこうした事実をとおして、鎌倉時代の人々がこの寺に寄せた憧憬を感じることができます。これらの貴重な成果をふまえて、今後も慎重に調査を進める必要があるといえるでしょう。永福寺跡が史跡公園として整備され、公開される日も遠くありません。

出土した水晶製の数珠

副納品（白磁小壺・櫛）の出土状況

扇骨・水晶製数珠・櫛の出土状況



経筒下の遺物出土状況

4.松谷寺やぐら　Yagura at the site of Shokōkuji Temple

● 石塔の並ぶ中世墳墓

鎌倉市役所の前から市内の常盤方面に向かう現在の道路が二つ目のトンネルにさしかかる付近一帯の佐助一丁目の地域は、かつて佐助の松ヶ谷（あるいは松谷寺谷、松枝谷）と呼ばれていた場所にあたります。この松ヶ谷は東に向かってい開いた谷戸で四つの支谷によって構成されています。住事、この谷戸には松谷寺という寺院のあったことが金沢文庫に残る古文書によって知られています。これまでにも同じ谷戸の最奥部で合計13基のやぐらが発見されています。（「鎌倉埋蔵文化財1」９ページに紹介）。今回の調査で新たに３基のやぐらが発見されたことにより、松ヶ谷の谷戸内におけるやぐらの確認数は合計16基となりました。さらに、やぐらの上段にテラス状の遺構が発見されたことも調査の成果として注目されます。

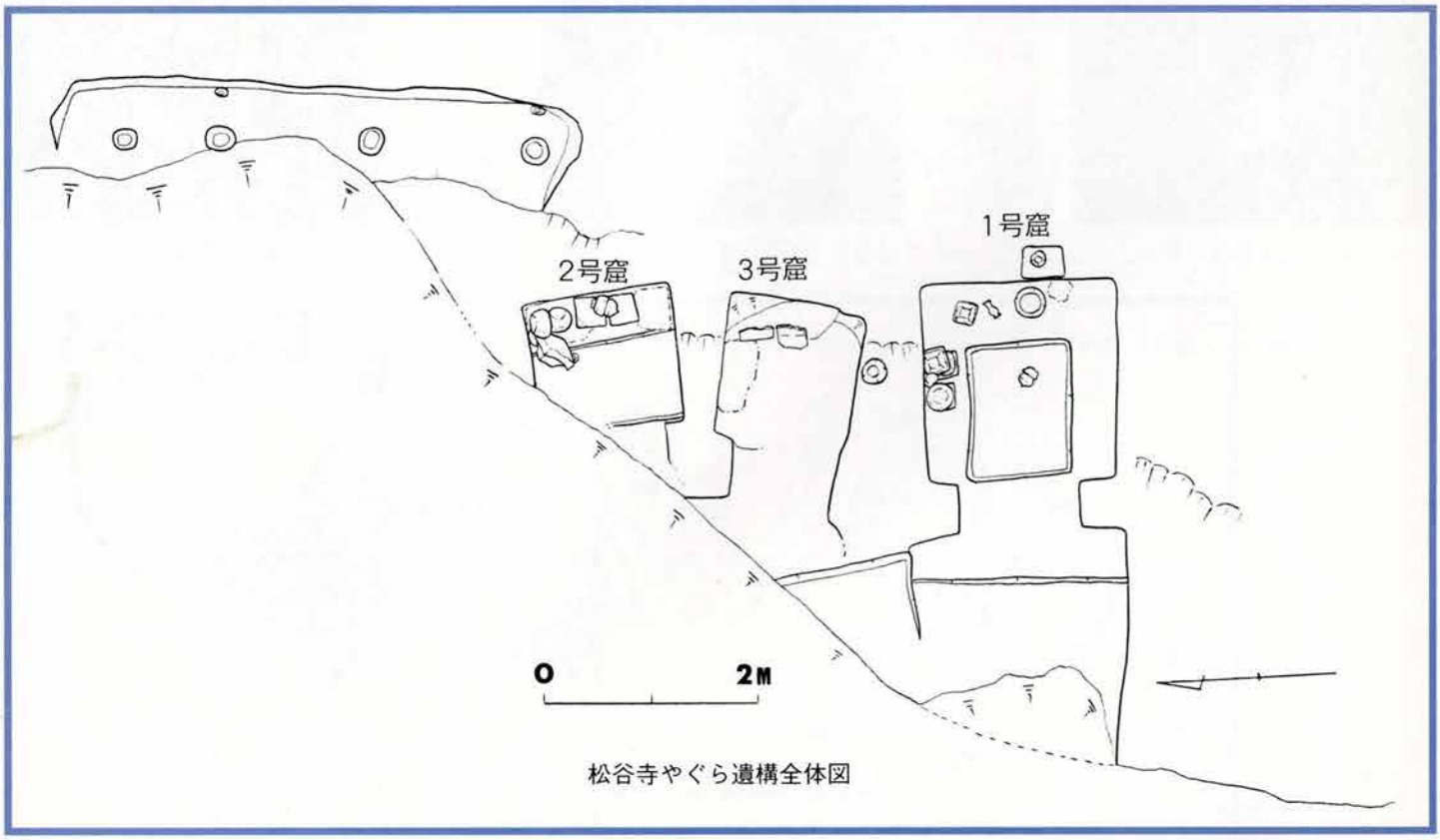
３基のやぐら群のうちで最も南側にある１号窟では玄室の床面から２基の五輪塔や14世紀初め頃のものと見られる瀬戸の鉄釉仏華瓶が出土しているほか、火葬骨が集中してみつかっています。

中央に位置する２号窟では玄室内の奥壁寄りの位置で板碑が直立した状態で発見されていますが、板碑からはその造立年代等を示す紀年銘は確認されませんでした。

北側に位置する３号窟では１号窟と同様に２基の五輪塔が出土しているほか、完形のかわらけ１点もみつかっています。

やぐらの上段で発見されたテラス状の遺構には南

松谷寺やぐら全景



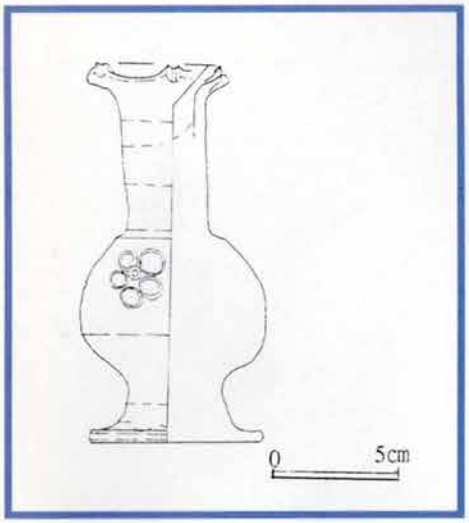
松谷寺やぐら遺構全体図

北方向に並ぶ四つの穴が確認されていますが、テラス状遺構の西側が遺存していない状況であるため、この穴が建物跡の柱穴の一部なのか、あるいは骨蔵器等を埋納した納骨穴であるのかを明らかにすることはできませんでした。

やぐらはよく知られるように僧侶をはじめとする階層の人々を主たる対象とした中世の石窟形式の墳墓であり、多くの場合、寺院と一帯となって営まれることが想定されています。松ヶ谷の谷戸内に存在するやぐらは、個々に誰を葬った墳墓であるかは不明ですが、松谷寺と深い関係にあった人々を葬った墳墓であることは容易に想像されるところでありましょう。古文書の記録から知られる松谷寺には松谷文庫なる施設が隣接してあったようであり、おそらく学問寺的性格を有する寺院であったと考えられています。松谷寺の名前が古文書に登場するのは嘉元２年（1304）から元亨元年（1321）までであることから14世紀を中心とした時期に最も栄えていた寺であるものと考えられます。嘉元３年（1305）や延慶２年（1309）には盛んに写経が行われていたことや、観応２年（1351）には一切経が開版されていたとの記録も古文書に散見することができます。１号窟で出土した瀬戸の鉄釉仏華瓶はおおむね14世紀の前半頃の年代が考えられる遺物であることも古文書の記録から伺い知ることのできる松谷寺の年代とも矛盾するものではありません。今回の発掘調査によって発見されたやぐらが松谷寺の存続していた時期に営まれたものであることはやぐらという墳墓と松谷寺の関係を考えるうえで注目すべきことと思われます。

１号窟　五輪塔及び瀬戸仏華瓶出土状況

２号窟　五輪塔出土状況



１号窟出土の瀬戸仏華瓶

３号窟　五輪塔出土状況

5.由比ヶ浜南遺跡　Site of Yuigahama-minami

●浜地で発見された多数の人骨や獣骨

由比ヶ浜の海岸線から国道134号線を隔てた場所（鎌倉海浜公園敷地）にある由比ヶ浜南遺跡では、2年間にわたる発掘調査で多数の人骨や獣骨が発見されました。この遺跡では鎌倉時代から江戸時代までの長期間にわたって人々の生活や土地の利用のあったことが発見された遺構や遺物から判明していますが、これらはおおむね4期に区分して各時期ごとの遺跡の様子が異なるという特徴がみられてます。

1期は13世紀の中頃から後半の時期にあたり、自然地形の埋め立てによってこの遺跡のある場所一帯の土地利用が開始された時期にあたります。海浜部に広がっていた入り江状の自然地形が当時の鎌倉の街中から発生したまさに今日的な言葉で表現すると産業廃棄物に相当するような不要な土砂等やたくさんの廃材となった木製品や土器片、陶磁器片によって埋め立てられる様子が確認されています。

2期は13世紀後半から14世紀前半にかけての時期にあたり、方形竪穴建築址や道路、井戸、溝などがつくられ、この場所が生活空間となる時期にあたります。調査区のほぼ中央には調査で確認できただけでも東西6間、南北2間の規模を有し、その東と西の両側の幅7尺の土塁を伴う大きな礎石建物がつくられてます。また、この建物の南側（海側）には角材を用いた柵列（塀）が設けられることが明らかになっています。礎石建物の西側には溝と幅3mの道路が発見されてますが、この道路は現在の六地蔵から海岸に向かう道路のほぼ延長線上にあたる方向性を示しています。この道路が礎石建物を中心とする屋敷地の前で途切れてしまう状況からは、この場所が当時の都市鎌倉の南限であったことが窺われます。

3期は14世紀後半から15世紀前半にかけての時期にあたり、大規模な埋葬遺構群が展開する時期にあたります。調

集積人骨の発見状況

板碑の発見状況

集積人骨

集積人骨

査の結果、単体埋葬が約300体、集積埋葬が約94基、火葬骨の埋葬が46ヶ所等の埋葬に係わる遺構が多数発見され、出土した人骨の数からこの地に埋葬された遺体の数は4,000体近くに達することが想定されます。この遺跡で特に注目されるものに、動物の頭蓋骨を並べた特殊な遺構があります。この遺構は動物の頭蓋骨を東西約８ｍ、南北約２ｍのＬ寺状に並べたもので、本来は浅い掘り込みを使って西・南・（東）の三方向を区切った壇状のコの字形区画であったと考えられます。動物の頭蓋骨列はウマ25点、ウシ11点、イルカ４点などによって構成されてますが、すべての頭蓋骨が区画の外側に顔を向けて並べられており、あたかも東西方向の動物頭蓋骨は顔が海を向いて整然と並べられてた様子が窺われます。さらにコの字形区画の内側や周辺で他の遺構が全く発見されてないことからも頭蓋骨群だけを意識的に際立たせるような異様な光景が彷彿され、祭祀的な意味合いをもつ遺構であったものと想像されます。

４期は16世紀以降の時期にあたりますが、３期までの遺構の状況に比べると極端に閑散とした状況で六道銭を伴う土壙墓数基が営まれる程度になることが確認されています。

動物骨列の発見状況

ウマ・ウシ・イルカの頭蓋骨

人骨の検出状況（単体埋葬）

木棺に葬られた人骨

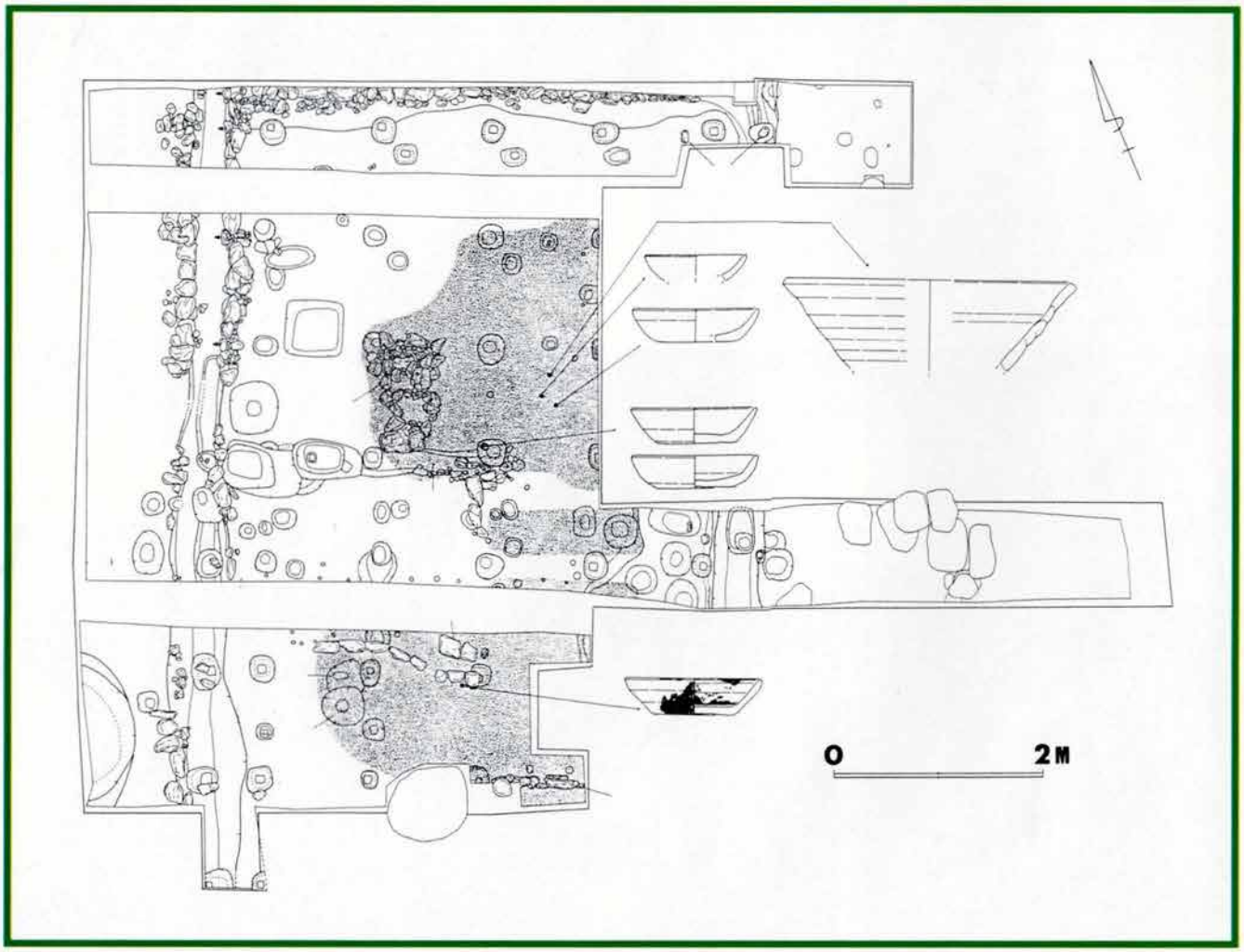
折り曲げられて埋葬された成人骨

6.東勝寺跡　Site of Tōshoji Temple

● 北条氏終焉の地

東勝寺は山号を青龍山といい、臨済宗と密教の兼学の寺院でした。官寺である関東十刹の第三位となっていました。嘉禎３年（1237）に北条泰時が栄西の弟子である退耕行勇を招き、寺を建立したのが始まりと考えられます。元弘３年（1333）の５月22日、新田義貞による鎌倉攻めに際し、屋敷を焼かれた北条高時は、この東勝寺にこもり、一族朗党以下870余人とともに、館に火をかけて自害したと伝えられています。寺跡のある場所（現在の小町三丁目）は葛西ガ谷と呼ばれ、滑川で区切られた西に向かって開く谷で、東勝寺橋を渡った東側一帯です。谷は３つの支谷からなり、その中でも最も奥行きのある中央の谷の山裾に880余人首塚（通称「高時腹切りやぐら」）があります。今回の発掘調査はこのやぐらの西側に当たる平地で行われました。東勝寺跡はこれまで昭和50年と翌51年に２度の発掘調査が行われています。その時の発掘調査では北条氏の家紋である三鱗文のある瓦や一般寺院ではあまり見られない青磁や天目茶碗などの貴重な中国製陶磁器などが発見され、また石垣や石畳状の坂道が発見された

客殿と推定される掘立柱建物跡



東勝寺跡　中央の谷の遺構全体図

ことから城塞的色彩の強い寺跡であることが明らかにされました。こうした調査の成果から、この遺跡が北条氏と深く関わりのある東勝寺の一部と推定され、その重要性によって調査の完了後、今日まで遺跡が保存されてきました。今回、平成８年から９年にかけて実施した発掘調査は、過去の調査における成果をふまえながら、東勝寺跡についてさらなる検討を進めるための基礎的な資料を得る目的で重要遺跡確認調査として実施したものです。

調査区の東側山裾では、岩盤を削り出した平場の存在が確認されてますが、この岩盤面より約20ｃｍ下がって、岩盤・地山を削り、西側を盛土した地業面上に掘立柱建物跡を検出しました。この建物跡は東西方向４間（4.8m）、南北方向７間（14.7m）以上、柱間は７尺（2.1m）、柱穴の大きさは40～50ｃｍ、柱の大きさは15ｃｍで全体に10数ｃｍの厚さの炭の層で覆われていました。この建物は掘立柱建物であり、堂以外の大型建物（約123m²）であることを考えると客殿ではないかと推定されます。出土品の総量はあまり多くはありませんが、柱穴の中から完形のかわらけが２枚出土しており、地鎮に使用されたものと考えられるほか、天目茶碗、青白磁の梅瓶、官窯系青磁など質の高い中国製陶磁器が出土しています。青磁や天目茶碗、そして瓦などの遺物は火を受けた痕跡があります。出土遺物の年代が14世紀中頃までのものと考えられ、さらに火災にあったものであることから元弘３年（1333）の火災で焼失した建物の器物であると推定されます。また建物が非常に大きく、葛西ガ谷の中央に位置し、谷戸の中で唯一腹切り伝説のある地に接して存在することから、北条高時一門が自刃した建物であるかも知れません。発掘調査の終了した東勝寺は遺跡を保護するために発見された遺構を埋め戻してあるため、現在では残念ながらその姿を見ることができません。これまでの発掘調査等で明らかにされた遺跡の重要性をふまえて、将来は国指定史跡の指定を受けられるように、今後も東勝寺跡の全容解明に努めて行きたいと考えてます。

出土した青白磁

出土した青白磁

出土した青磁、緑釉陶器

出土した天目茶碗

7.円覚寺旧境内遺跡

漆　器

北鎌倉駅にほど近い円覚寺旧境内遺跡では埋没河川が発見され、円覚寺の創建に伴って小袋谷川の流れが改修されていることが判明しました。発見された河川跡からは多くの木製品が出土し、このなかには朱漆で美しい文様を描いた漆器の椀・皿がみられます。これまで若宮大路周辺等の旧鎌倉市域では多くの調査地点で漆器が多く発見されていますが、山ノ内一帯の調査では希少な発見例といえます。

漆　器（円覚寺旧境内遺跡）

8.若宮大路周辺遺跡群

渥美の壷

若宮大路の西側、小町二丁目のビル建設用地の発掘調査で、12世紀末から14世紀前半にかけての３時期にわたる中世の遺構面と中世以前の溝が発見されました。３面（12世紀末～13世紀前半）で確認された井戸の底から渥美窯産の壷と同じ東海地方産の片口の入子（皿）が出土しました。壷と片口はおそらく井戸が埋め立てられる際の井戸鎮め儀礼において一括で埋納されたものと考えられます。

渥美の壷（若宮大路周辺遺跡群）

9.名越ヶ谷遺跡

銅製水滴と水滴入れ

大町４丁目に所在する名越ヶ谷遺跡の発掘調査では、銅製の水滴と水滴入れが出土しています。水滴とは墨をするときに硯に水を差すために用いる文房具です。市内ではこれまでにも今小路西遺跡（御成小学校内）や史跡北条氏常盤亭跡などで銅製や金銅製の水滴が出土していますが、水滴が水滴入れとセットで出土したのは今回が初めてです。水滴の肩部から体部にかけては毛彫りの細工が施され、松喰い鶴の文様が描かれています。

銅製の水滴（右）と水滴入れ（左）（名越ヶ谷遺跡）

Buried Cultural Properties in Kamakura

1.We have sites of Yayoi period (from Neolithic to Chalcolilthic culture , 3rd Century B.C.-A.D. 3rd century) in Dai hills, Tebiro area, sea-side dune area, along Hase street and Okura area in Kamakura.The excavation of Okura Bakufu Shuhen site revealed 14pit dwellings on northern bank of Nameri-kawa alluvlal plain. These 14 dwellings suggest a way of village life, as we can see three pit dwellings of them, which indicate enlargement of houses belonging to middle phase of Yayoi Period, 1st century.

2.Eight 〝Ohketsu-bo〞 which are cngraved tomb chamber on steep slope of hills were found in Terabun-Fujitsuka site, 400m north-west to huge site of Yamazaki 〝Ohketsu-bo〞 group of had destroyed 40 year ago by housing They are the tombs of some chiefs of Kamakura, belonging to late phase of Kofun Period, from the end of 7th to beginnings of 8th century.

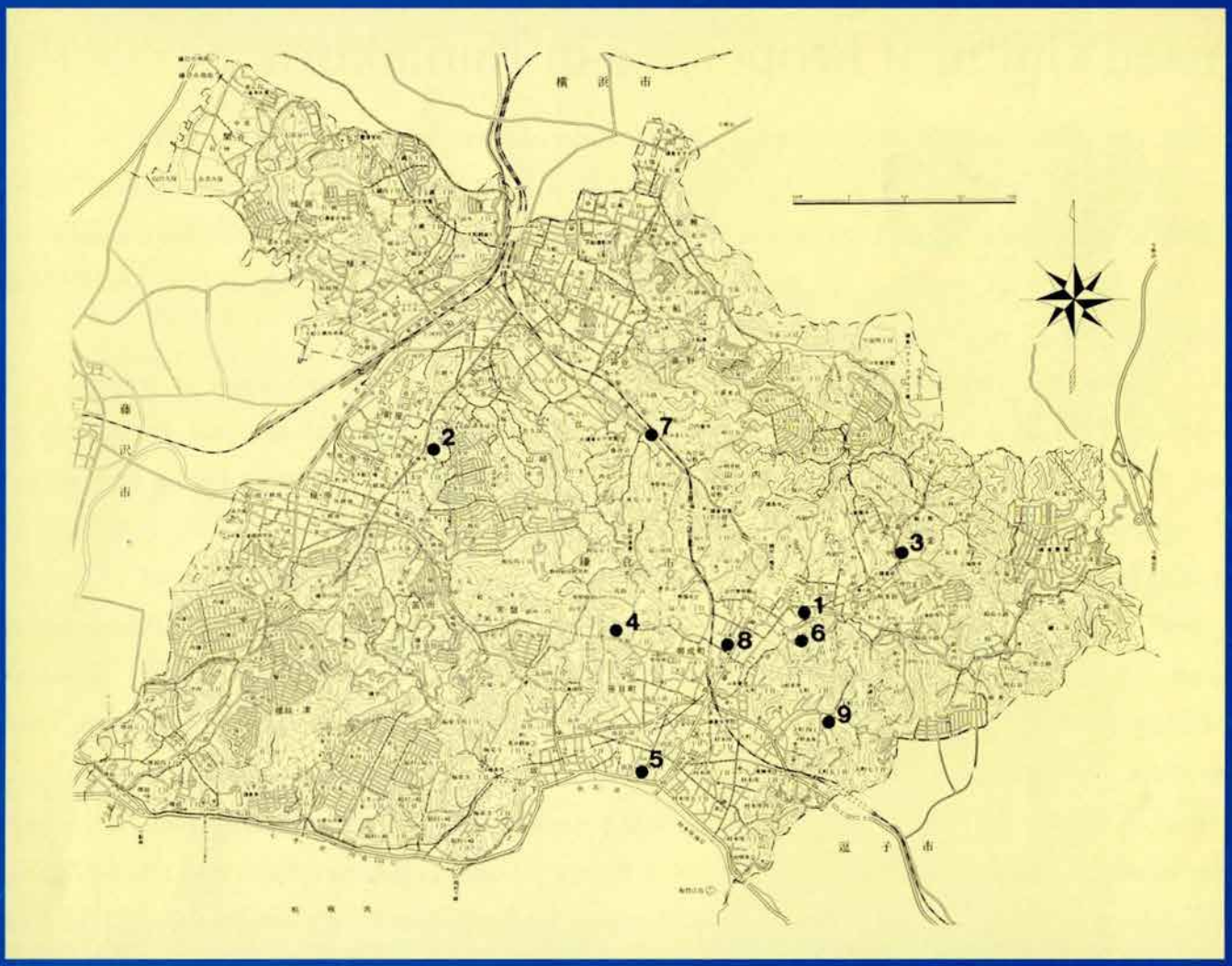
3.Yohfukuji abandoned Temple (Registered National Historical Properties), which had been excavated many times since 80′ s to bring out the structures used to be, was built by Minamoto Yoritomo who established Kamakura Bakufu in the end of 12th Century. Latest excavation has revealed 〝Kyoutsuka〞 belonging to end of 12th Century on top of the eastern hills that are surrounding the sublime temple and garden. 〝Kyotsuya〞 means the structure of burying the sutra for which people desired benefits in the world and next. Excavated 〝Kyoutsuka〞 contained a large jar which are filled with an axis for sutra, a sutra container made of bronze, ten wooden combs in a Chinese porcelain small pot and a folding fan. These elaborate objects and it's location suggest that this 〝Kyoutsuka〞 had been buried by Minamoto Yorritomo himself or close relatives of him.

4. 〝Yagura〞 is well known as the cave tomb for Buddhist priests of Eastern Japan, typically in Kamakura, was revealed three caves belonging to 14th Century in the valley of Sasuke 1chome （松が谷 Matsugayatsu）in where 13 〝Yagura〞 had been unearthed till now, in 1997. As old documents tell that the perished Shokokuji（松谷寺）temple was in the Matsugayatsu valley, these 16 〝Yagura〞 had any relationships to Shokokuji temple.

5.Excavation of Yuigahama-minami site is sltuated on seashore revealed on seashore revealed many structures and relics belonging four residential Periods which are Kamakura to Edo period during the excavations of two years. Of these periods, it is noteworthy that four thousand bodies were buried in individually and being piled up in pit structures of 3rd Period. And a peculiar structure was unearthed from this period. It is placed skulls fo horses. bulls and dolphins being faced to seashore in L figure shaped in 8×2m.

6.Toshoji abandoned temple site, has been estimated the perished Toshoji temple in where Hojo takatoki,political leader of Kamakura Bakufu, had killed himself in 1333 when Kamakura Bakufu had destroyed had been excavated in 1975 and 1976. The excavation of 1997 was conducted to gain the basic data for the purpose that the site should be a Registered National Historical Properties. Discovered structures are post-holes making a bullding covered by ash layer 10cm in thickness. It is prosumed that the building burned down in 1333, because Temmoku bowls, Ching-pai jars and Celadons of government kilns which were suffered from fire,are belonging to middle of 14th century.

本書掲載の調査地点



《掲載遺跡名称一覧》

1	大倉幕府周辺遺跡群	2	寺分藤塚遺跡	3	史跡永福寺跡
4	松谷寺やぐら	5	由比ケ浜南遺跡	6	東勝寺跡
7	円覚寺旧境内遺跡	8	若宮大路周辺遺跡群	9	名越ケ谷遺跡

鎌倉の埋蔵文化財 2

発行日　平成10年3月31日

編集・発行　鎌倉市教育委員会

印刷　中川印刷株式会社